

アジア民衆史研究 第10集

2004年度報告

移動・接触からみる 空間認識

東アジアにおける民衆の世界観(4)

序文

アジア民衆史研究会は、2001年度以来、ワーキンググループの準備を踏まえた定期的な研究会によって成果を蓄積する活動を続けている。個別の報告に入る前に、趣旨文を音読して討議し、問題意識の共有をはかってきた。この方法は、趣旨の浸透、議論の積み重ねという点で長所があり、参加者数からみても、安定した研究会が続いている。

そうした蓄積が進むなかで、この研究会が当初持っていた冒険的な性格、すなわち韓国や中国や台湾やベトナムなど、東アジアの各地に実際に出かけて、その地の研究者と研究状況を語り合ったり、研究会を開いたりすることの意義があらためて明確になってきた。そこで、無理のない研究交流を実現するための外部資金を調達する申請活動も行いながら、2004年夏には、韓国の歴史問題研究所へ出向き、中国の研究者の参加も期待できるような国際交流について提案し、意見交換の結果、お互いの持ち味を尊重し合う研究交流の実行について合意が得られた。現在のアジア民衆史研究会は、学界での位置を確立していない、成長過程にある若手研究者の活動力に支えられているが、これからの国際交流は、この特徴を良い意味で生かし、韓国や中国の同じような立場にある若手研究者を主力にした交流活動をベースにしたものにしていきたいと考えている。

本論文集は、2004年度の研究活動の成果を収録したものであるが、これは2001年度以来の中長期的プランの線上にある。われわれは2001年度、「東アジアにおける民衆の世界観」を中長期的テーマとして掲げ、「人々の空間・時間・人間に関わる意識の総体」を世界観と理解して、年度ごとに角度を変えつつ検討・考察の具体化をはかることになった。2002年度には、同様に民衆の世界観を大テーマにしながらか、「他者」をめぐる空間認識」を年度のテーマにして研究会を重ねた。

「空間認識」をわれわれは、人々が生活する家・村や町などの日常的な空間から、国家・アジア・世界・宇宙などに至る三次元的な場についての意識のありよう、という意味に理解している。そして、人々が特有の空間認識で世界をとらえ行為を規定されながら、逆に生活・活動を通じて所与の空間認識を主体的に変えていく、その相互関係をとらえることに努めた。2002年度は、ウェスタンインパクト以降の東アジアの場において、民衆の「他者」観が「空間認識」変容とどのように関わるか

をめぐって研究会を重ねた。2003年度もそれを継続し、「「他者」をめぐる空間認識(II)」として取り組んだ。

2004年度も民衆の世界観を継続テーマとしながら、「移動・接触からみる空間認識」を年度のテーマに立てた。「出会い」の場、「対面」の場に視点をしばって、そこでの「空間認識」の変容、ひいては世界観の主體的な形成の契機を探ろうとしたもので、会活動としては、中期的テーマを年々反省しつつ具体化しているつもりである。

現実の東アジア諸社会は、愛憎コンプレキシティの軋みや懐かしみの感情をほとばしらせたりするが、われわれは、それらの表れにも緊張意識を持ち、歴史学徒として国境を超えて交流しながら歴史の解明に努めて成果を現実に還元し、アジアの歴史学を世界に向けて発信する努力を続けたい。

本論文集に対する会員・読者からの忌憚のない批判をいただければさいわいである。

2005年5月1日

アジア民衆史研究会代表 安在邦夫 深谷克己

目次

アジア民衆史研究 第10集

序文

安在邦夫 深谷克己

趣旨文 2004年度 移動・接触からみる空間認識

鈴木文 10

第一回研究会

『ニッポン人異国漂流記』を読む

佐野智規 12

コメント：書評に接して

小林茂文 24

討論要旨

29

大会（第二回研究会）

自由民権期の海外移動とその歴史的考察
——私的研究史の整理——

新井勝紘 33

清に対する琉日関係の隠蔽

渡辺美季 49

参加記：

大庭祐介 68

参加記：

深瀬公一郎 71

討論要旨

73

第三回研究会

「華人の世紀」と近世北部ベトナム —— 1778年の越境事件を素材として——	蓮田隆志	76
討論要旨		95

第四回研究会

関東大震災に対する植民地朝鮮での反応	丸本健次	101
討論要旨		119

第五回研究会

博徒・博徒集団の実証的研究 —— 武蔵国北多摩郡地域およびその周辺地域の博徒群像——	高尾善希	124
討論要旨		142

2003年度第四回研究会

朝鮮王朝後期の『邑誌』編纂にみる空間認識について —— 『輿地図書』と私撰邑誌の比較から——	文純實	147
討論要旨		165

목차

아시아민중사연구 제 10 집

서문

안자이 쿠니오
安在邦夫

후카야 카쓰미
深谷克己

취지문 2004 년도 이동·접촉으로부터 보는 공간인식
동아시아에 있어서 민중의 세계관 (4)

수주키 아야
鈴木 文 10

제 1 회 연구회

‘일본인 이국 표류기’ 를 읽다

사노 토모노리
佐野智規 12

코멘트 : 서평을 접해서

코바야시 시게후미
小林茂文 24

토론요지

29

대회 (제 2 회 연구회)

자유민권기의 해외이동과 그 역사적고찰
——사적역사의 정리——

아라이 카쓰히로
新井勝紘 33

청에 대한 류일관계의 은폐

와타나베 미키
渡辺美季 49

참가기

오바 유키
大庭裕介 68

참가기

후카세 코이치로
深瀬公一郎 71

토론요지

73

제 3 회 연구회

‘화인의 세기’ 와 근세북부베트남

학수 다 타카시
蓮田隆志 76

토론요지 95

제 4 회 연구회

관동대진재에 대한 식민지조선에서의 반응

마루모토 켄지
丸本健次 101

토론요지 119

제 5 회 연구회

박도·박도집단의 실증적연구

——무사시국 북타마군지역 및 그 주변지역의 박도 군상——

타카오 요시키키
高尾善希 124

토론요지 142

2003 년도 제 4 회 연구회

조선왕조후기의 ‘읍지’ 편찬로 보는 공간인식에 관해서 江南社会

—— ‘여지도서’ 와 사찬읍지의 비교로부터——

문 순실
文 純實 147

토론요지 165

移動・接触から見る空間認識

—東アジアにおける民衆の世界観(4)—

アジア民衆史研究会では2001年度以来、中長期的なテーマとして「東アジアにおける民衆の世界観」を掲げている。空間・時間・人間に関わる意識総体を〈世界観〉として把握し、そこからアジア地域における民衆の主体形成の問題を検討することを課題としている。

このテーマのもと、2001年度は民衆の〈世界観〉の一側面として「君主観」の問題を取り上げ、続いて2002年度・2003年度は、「他者をめぐる空間認識」の問題を取り上げた。民衆は自らの所属している空間をどのように認識しているのか、という問題意識のもと、2002年度は大きく視野を広げ自己と他者との関係の中における空間認識を検討した。さらに2003年度には特に権力関係の中での空間認識の問題を検討し、支配層と民衆との認識のズレの問題について検討することが出来た。また、「境界」というものがア prioriに存在するのではなく、「他者」との出会いを通じて形成されていくものであること等についても、幅広い議論をすることが出来た。

しかし、一昨年度及び昨年度における空間認識というテーマは、アイデンティティの問題に回収される可能性があるという問題点が浮き彫りとなった。また、「空間」というものを、日常的な空間から、宇宙や世界といった意識的にしか理解出来ない空間、さらには「国民的共同体」といった仮想的空間にまで幅広く設定したために、議論の焦点が絞り切れないという問題が生じた。

そこで本年度は、昨年度までのテーマである空間認識の問題を継承しつつも、より焦点を絞り、さらに具体的なものとして「移動」の問題に着目したい。移動の結果として起こる接触の場面は、空間認識という視点から見れば「対面空間」と言うことも可能である。移動によって生じる接触は、それまで保持していた〈世界観〉の変容を迫りうる。あるいは接触により、それまでの〈世界観〉をさらに強固なものに再編していくことも考えられる。「対面空間」すなわち出会いの場面でのどのような認識が形成され、あるいは変容を遂げるのか。移動・越境・接触の場面での〈世界観〉の形成と変容に着目することで、こうした問題に迫ることが可能であると考

える。

またここでは、「国家を背負った人間同士の接触」という認識を前提とせずにひととひととの接触による〈世界観〉の形成過程と変容を検討し、その経験がさらに意識・移動(実践)を規定してゆく過程を検討していくことにしたい。ここでは、時代設定を「近代移行期」のみに限定せずに、その前後の時期を含めて幅広く見ることで、「前近代」と「近代」との差を浮き彫りにしていきたい。特に、植民地等の「近代」特有の問題を考えるためにも、時代設定を小さく限定せずに長期的視野で検討することが有効であると考えている。地域設定においても、欧米との接触によって「近代」への対応を迫られた地域としての「アジア」を対象としながら、その「アジア」という空間認識自体がこの時期に作られていくという過程をも視野に入れて議論を深めていきたい。

具体的には、漂流・移民・交通・観光などの事例をもとに、民衆の〈世界観〉を知るための方法を模索しながら、移動の結果として起こる接触の場面で、民衆の〈世界観〉がどのように構築されていくのかという問題に取り組んでいきたい。

文責：鈴木文

(アジア民衆史研究会ワーキンググループ)